

小説『田舎教師』の舞台・羽生

【田山 花袋】(たやま かたい)

1871年(明治4)～1930年(昭和5)
群馬県邑楽郡館林町(現 館林市)生まれ。
明治・大正時代を代表する自然主義文学の
小説家。

義兄であり終生の友人である建福寺住職の
太田玉茗のもとを訪れた際に、小林秀三の日
記と出会い執筆を始める。明治42年(1909)に小林秀三
をモデルとした小説『田舎教師』を発表した。



【小林 秀三】(こばやし ひでさう)

1884年(明治17)～1904年(明治37)
栃木県足利郡小俣村(現 足利市)生まれ。
小説『田舎教師』で主人公林清三のモデル。
明治34年(1901)17歳で三田ヶ谷村の
弥勒高等小学校の代用教員となり、一時期は
太田玉茗が住職を務める建福寺に下宿した。

その後、勤務する小学校の宿直室での生活を経て、明治37
年(1904)より羽生町で両親と暮らす。しかし、病気によ
り20歳の若さで生涯を閉じた。



【太田 玉茗】(おおた ぎよくめい)

1871年(明治4)～1927年(昭和2)
埼玉県忍町(現 行田市)生まれ。
建福寺23世住職。

『田舎教師』に「山形古城」の名で登場
する。明治24年(1891)に東京専門学
校(現 早稲田大学)入学後、新体詩人とし
て創作活動を行う。明治30年(1897)に宮崎湖処子や国木
田独歩などと合著詩集『抒情詩』を刊行した。また、妹の里さ
が田山花袋と結婚して義兄となり関係が深まった。



羽生ゆかりの人物たち

人名	生没年	分野・業績等
秋山 文林	1823年(文政6)～ 1900年(明治33)	教育者。尾上朝雲から読書、蓮台寺住職の醇盛に押花術を学んだ。また、館林藩儒田中泥舟から詩、大竹蔭塘に書を学んだ。
石和 鷹	1933年(昭和8)～ 1997年(平成9)	小説家。雑誌『すばる』編集長。本名は水城頭。
石井 謹吾	1877年(明治10)～ 1925年(大正14)	衆議院議員。弁護士。東印拓殖、南洋興業社長。
出井 兵吉	1871年(明治4)～ 1960年(昭和35)	衆議院議員。初代羽生市長。
大越 もん	1887年(明治20)～ 1979年(昭和54)	教員。小説『田舎教師』に描かれる。小林秀三から作文の添削を受ける。
岡田 十松	1765年(天明2)～ 1820年(文政3)	神道無念流剣術家。剣術の達人。
尾上 朝雲(朝運)	1807年(文化4)～ 1868年(明治元)	仏師。木造不動明王坐像(下村君永明寺)、木造大黒天立像(同寺)、五大明王像(足利市五尊教会)などを制作。
木戸 忠朝	生没年不詳	戦国時代後期の武将。羽生城主。天文5年に兄の広田直繁と小松神社に三宝荒神御正体を奉納。
木戸 元斎	生没年不詳	戦国時代末期の武将。父は羽生城主木戸忠朝。
小林 三季	1887年(明治20)～ 1971年(昭和46)	日本画家。小説『田舎教師』のモデル小林秀三の教え子。本名は小林丈之進。
斉藤 珪次	1860年(万延元)～ 1928年(昭和3)	衆議院議員。板垣退助内相の秘書。また、長男重雄は県会議長、次男圭一は県議会副議長を務めている。
渋井 太室	1720年(享保5)～ 1788年(天明8)	儒学者。羽生領の不動院で勉強をする。24歳で70石を佐倉藩から給され、藩の侍となった。
清水 弥右衛門	1778年(安永7)～ 1832年(天保3)	町場村の名主。豪商。清水卯三郎の祖父。
田口 庸三	1879年(明治12)～ 1955年(昭和30)	実業家。大阪第百三十銀行、第三銀行の支店長を経て足利銀行頭取となる。
田沼 宗市	1892年(明治25)～ 1957年(昭和32)	医師。現在の川口市で医院を開業。県医師会会長と日本医師会副会長に就任。地域医療の整備や振興等に活躍。
根岸 貞三郎	1861年(文久元)～ 1921年(大正10)	県会議員。民権運動家。自由民権運動に参加後、今泉村村長や県会議員となる。
保泉 良輔	1859年(安政6)～ 不詳	民権運動家。掘越寛介と行動をした。
掘越 寛介	1859年(安政6)～ 1916年(大正5)	政治家。実業家。民権結社通見社を組織。
掘越 庭七郎	1826年(文政9)～ 1899年(明治32)	本川俣村の名主。明治7年に第13区長、明治12年北埼玉郡長となる。
渡辺 喜代三郎	1864年(元治元)～ 1945年(昭和20)	県会副議長。経営者。行田足袋被服工業組合理事長など足袋業界の発展に貢献。また、新郷村の村長を3期務める。
綿貫 来歎	1846年(弘化3)～ 1894年(明治27)	民権運動家。僧侶。今泉村長光寺25世、今泉学校や羽生学校で教鞭を執る。羽生町の国会期成同盟代表。

出典・参照
羽生市史編集委員会編『羽生市史 上巻』羽生市、1971年
羽生市史編集委員会編『羽生市史 下巻』羽生市、1975年
埼玉県教育委員会・埼玉県立文書館編『埼玉人物辞典』県政情報センター、1998年



清水 卯三郎



小澤 愛次郎

羽生市立郷土資料館



宮澤 章二

羽生ゆかりの人物たち

【利用案内】
〒348-0026 埼玉県羽生市大字下羽生 948 番地
Tel 048-562-4341 Fax 048-563-5873
開館時間 午前9時～午後4時30分(入館無料)
休館日 火曜日、第4木曜日、年末年始
※展示入れ替えのため、閉室日あり。展示期間
はホームページを参照。
URL <https://www.city.hanyu.lg.jp/docs/2020072500015>

【交通アクセス】
東武伊勢崎線・秩父鉄道
羽生駅 徒歩 25分
東北自動車道
羽生 IC 5分

様々な分野で活躍した羽生ゆかりの人物たち

(産業)

【清水 卯三郎】(しみず うさぶろう)

1829年(文政12)～1910年(明治43)

武蔵国町場村(現羽生市)生まれ。貿易商。出版業。江戸で商人の見習いとなり、語学を学び英・仏・蘭・露の4ヶ国語を習得した。文久3年(1863)の薩英戦争時には通訳を務める。慶應3年



(1867)パリ万博に唯一の商人として参加。酒や茶、美術工芸品を初出品する。その展示が評価されナポレオン三世から銀メダルが授与された。帰国後は瑞穂屋を創業し、出版業や歯科医療器具の輸入を手掛けた。また、国民の知識や教養の向上のため、「かな文字」の普及を勧めた。正光寺(羽生市北二丁目)にある卯三郎の墓には、仮名文字論者らしく「しみずうさぶろうのはか」と刻まれている。

(産業)

【松本 伴七郎】(まつもと ばんしちろう)

1845年(弘化2)～1915年(大正4)

武蔵国三田ヶ谷村(現羽生市)生まれ。養魚業経営者。民権運動家。

湿地帯の多い三田ヶ谷で鯉の養殖を考案して、明治11年(1878)に鯉魚養殖会社を設立した。同時期には、国会開設運動にも参加する。

また、明治21年(1888)の町村制施行で三田ヶ谷村村長の職に就く。明治27年(1894)には埼玉県水産奨励会をつくり、私財を投じて県内に鯉のふ化場を開設する。さらに、利根川に橋を架けるなど地域の発展に情熱を注いだ。

(教育)

【岡戸 文右衛門】(おかど ぶんえもん)

1835年(天保6)～1906年(明治39)

武蔵国手子林村(現羽生市)生まれ。学校創設者。

5歳の頃から寺子屋で学問を学び、9歳で江戸へ出て剣術も習った。

成人後は下手子林村戸長に就いた。また、子ども達には教育を受けさせることが大切であると考えて、住民に解いて回るが当初は理解が得られなかった。しかし、住民を説得して明治6年(1873)清浄院(羽生市下手子林)に広聞学校(現市立下手子林小学校)を開校した。その後、私財を投じ有志に協力を求めて不動岡中学校、埼玉英和学校(現県立不動岡高校)の創設にも尽力した。

(教育)

【小澤 愛次郎】(おざわ あいじろう)

1863年(文久3)～1950年(昭和25)

武蔵国小針村(現行田市)生まれ。剣道家。政治家。

14歳から剣道をはじめ、忍町(現行田市)佐間の講武道場で松田十五郎貞好につき小野派一刀流を修行する。桑崎村の小澤文右衛門の養子となる。

明治21年(1888)同村に「興武館」

道場を建てた。また、政治家として剣道や柔道などを学校の授業に取り入れるために尽力した。後に、剣道家として最も高い名誉である「剣道範士」の称号を受けた。現在、毘沙門堂境内(羽生市西一丁目)には胸像がある。



(芸術)

【三村 秀竹】(みむら しゅうちく)

1905年(明治38)～1996年(平成8)

埼玉県川俣村(現羽生市)生まれ。書家。本名は三村義雄。

「宮大工の三村家」の長男として生まれる。18歳で上京後、日本を代表する書家として日展で様々な賞を受賞、後には日展審査員や書道関係の役職を務めた。



「東京新聞」をはじめ複数の新聞や雑誌の題字、サッポロビール「吟仕込」のラベル、羽生市民憲章を揮毫する。平成元年(1989)に羽生市名誉市民へ推挙され、紺綬褒章も受章した。

(文学)

【宮澤 章二】(みやざわ しょうじ)

1919年(大正8)～2005年(平成17)

埼玉県三田ヶ谷村(現羽生市)生まれ。詩人。

県内外で300を超える小・中・高校の校歌を作詞する。また、30年近く「埼玉風物詩」の創作をライフワークとした。

現在、多くの人々に愛唱されている「ジングルベル」の日本語の歌詞、平成23年(2011)の東日本大震災直後にACジャパンのCMで使われた「行為の意味」も宮澤の作品である。平成6年(1994)に羽生市民栄誉賞を受賞した。

